# 經濟論叢

第八十六卷　第一號

tramp と liner……佐　波　宣　平　1

イギリス新組合主義と標準八時間制
……前　川　嘉　一　17

租税国家論についての一考察……横　尾　邦　夫　36

プロレタリア階級意識の端緒的成立
……高　橋　正　立　47

昭和三十五年七月

京都大學經濟學會

# プロレタリア階級意識の端緒的成立

## ――ワイトリングの社会思想（下）――

高橋正立

### 一　第二の「平等」――政治から経済へ

前稿で見たように、ワイトリングは現代の社会秩序の全面的批判を展開しつつ、かれの目から見た現代社会の像を画き出している。その社会像の特徴は、第一に、社会をまっ二つに引き裂く分裂性である、富者対貧者（労働者）の許しがたい不平等がこれである。第二に、社会のこの分裂性を規定し、分裂したこの社会の土台となっているものが私有財産制度、貨幣制度という経済制度である、ということである。

第一の点について。ワイトリングが現代社会をば階級対立を軸にしてつかんだということは、直接には、かれが特定の階級的立場に立っていたということを意味し、間接には、共通の利害をもった一階級が他階級との対立において現実に形成されていたか、少なくとも形成されつつあったことを表現するものである。

第二の点について。ワイトリングが社会の性格――分裂性――を規定する要因を経済の面でつかんだということは、第一の点にかかわらせて見るとき、かれが立っていた階級は経済面でとくに不利をこうむっている階級、つまり無産者階級であることを示している。

この節では、第二の点にかかわらせながら、第一の点を、ワイトリングの思想の中で、いま少し詳しく見ていこう。

社会の性格を規定するものを政治的なものに求めないで経済的なものに求めたワイトリングの方法は、実は政治そのものの否定を媒介とすることによって出て来たものである。かれは、未来社会では政治（統治）を認めない。そこではただ行政（管

理）が存するのみである。[1] だが、この政治そのものの否定は、実はその裏に、ブルジョア民主主義批判をふくんでいた。「社会の行政は、君主にも、独裁者にも、また共和国の選挙における多数派にもゆだねることはできない。これらの統治形態は、いずれも個人的利益を管理するものであり、そしてまさにその個人的利害関係を利用して政権の座についたものである」（一三六頁）とかれが述べているのを、かれの民主主義批判（一四四―七、一五〇頁）とあわせて考えれば、このことは明らかである。

(1) Weitling, W., *Garantien der Harmonie und Freiheit*, mit Aenderungen der 3. Auflage [1849], einer Einleitung und Anmerkungen, neu hrsg. von Bernhard Kaufhold, Berlin 1955. S. 136 ff.（以下、本書よりの引用はすべてカウフホールト版により、多くのばあい、頁数のみを本文中に示すことにする。）

ブルジョア民主主義の否定は、また共和主義の否定でもある。「俗物政治家どもは、まずもって獲得さるべきものは不平等な状態だ、と思いこんでいる。そのばあい、かれらはその不平等な状態を共和国と呼んでいる。またかれらは、政治革命がなさるべきだ、と思いこんでいる。政治革命とは、かれらによれば、政権交代、つまり教養貴族と貨幣貴族のために君主と貴族をうち倒すことである。」（二七二頁）そして、この共和主義批判



がさらに、「二度の革命で民衆は金持ちたちの側に立ったのに、かれらは貨幣の力で政府を横奪したのだ。」（二四三頁）という言葉になる時、ワイトリングの言う共和国とは、九二年と三〇年の二度の革命[1]を経たフランス共和国のことである、ということがはっきりする。

(1) 「九二年の革命」とは、一七九二年八月十日に始まる王側の転覆を指すものと見られる。（九七頁）

こうして見てくると、ワイトリングが経済をば社会を規定する根本のものだと見たのは、フランス革命という歴史の体験を踏まえてのことであったことがわかるとともに、かれの立っていた階級の立場というのは、フランス革命に参加しながら何の利益にもあずからなかった階級の系譜をひく階級のそれであることが明白となろう。つまり、フランス革命においてはブルジョアジー、下層民衆によって担われていた平等観念が、そのごは、その担い手の中からブルジョアジーを排除しながら、同時にその観念の内容を具体化しつつ変質していったのである。社会主義一般の思想史上の成立根拠はまさしくここにあった。[1]

(1) 社会分析の視点が政治から経済へ移るとともに、政治的立場がブルジョア民主主義からその否定へと変るという社会主義のこの成立過程を、われわれは初期マルクスの個人的な精神発展史の中でも見ることができる。（Cornu, Auguste, *Karl Marx. Die ökonomisch-philosophischen*

*Manuskripte*, Berlin 1955. S. 1/10. G. Lukacs, Zur philosophischen Entwicklung des jungen Marx. in "*Deutsche Zeitschrift für Philosophie*," 2. 2. Jg. 1954.（平井俊彦訳『若きマルクス』ミネルヴァ書房）

他方、現実の過程を見てみると、旧制度を打倒したフランス革命は、資本主義の自由な展開を可能にし、中産階級の没落、手工業者・貧農のプロレタリア化を促すことになった。社会主義思想の担い手はかれら以外にはありえなかった。

かくして、社会主義思想は二重の意味において――その思想内容、その担い手にかんして――フランス革命の所産であった、ということができる。しかも、それはフランス革命によって生み出されたのであるが、同時にそれは、フランス革命の成果――ブルジョア国家、資本主義――を否定せねばならぬものとして生み出されたのである。

しかし、この社会主義思想の担い手が、それまで自分の属していた階級の、つまり手工業者なり農民なりとしての性格を多く残していればいるほど、かれらが懐く社会主義思想も、たんなる現状否定とユートピア（多くは過去への郷愁）の傾向を強くもたざるをえないだろう。社会主義思想が力強く未来を見つめるものであるためには、その担い手は、自分の存在根拠を新らしく成立した社会のうちにもち、しかもこの新らしく成立した社会にたいして否定的な関係に立つことが必要である。いいかえると、社会主義思想がフランス革命の自由・平等の思想を受けつぎながら、科学的社会主義へと発展して行くためには、社会主義思想はその担い手を、資本制的生産諸関係の成立とともに没落していく階級から、それら諸関係のもとではじめて成立してくる階級へと変えなければならないはずである。そのような階級にしてはじめて自己を一つの階級として意識することができるようになるからである。

だが現実の過程としては、この新らしい階級も古い階級の再編成という形で形成されざるをえず、したがって社会主義思想の発展も実際は、階級関係のこの再編成の過程の一部としての第四身分の第三身分からの分離、そしてさらに、単一なプロレタリア階級の形成という過程に照応したものである、と考えることができよう。

では、ワイトリングが立っていたのはいかなる階級の立場であったろうか。別な問い方をすれば、問題はつぎの二つに分れる。第一問――ワイトリングの階級と近代的なプロレタリアートとの距離はどれだけであったろうか。第二問――またこの距離に応じて、その階級の階級としての純粋性・統一性がうすれるはずだが、ワイトリングのばあいにはそれはどの程度のものであったろうか。階級関係はこれを経済のうちに見なければならない。われわれは次節以下でワイトリングの論述に即してこれらの点を見ていこう。

## 二　階級的自覚の成立

ワイトリングが現代社会を二大階級の対立においてとらえていたことはすでに見たとおりであるが、それではかれはこれらの階級をどのような規定でつかんでいたのだろうか。そしてかれのつかんでいた階級の現実の内容はどんなものであったろうか。

『保証』のなかでかれがもっともしばしば用いている言葉にしたがえば、現代社会の対立は「富者」(der Reiche) と「貧者」(der Arme) とのあいだにあった。[1] また、かれは、これらの階級を表わすのに「働かない者」(Menschen, die nicht arbeiten, cd. der Müssiggänger, der Faulenzer) と「働く者」(Menschen, die arbeiten, od. der Arbeiter) という言葉をも好んで使っている。[2] しかしよく考えて見ると、なるほどこれらはいずれも不平等を示す概念であるにはちがいないが、といって、これらからただちに社会を二つに分つ対立が生じて来るといった概念では決してない。「富者」と「貧者」は消費面における量的な差異ないしは対照を示すにすぎず、また「働かない者」と「働く者」という概念も、かれのばあい、「怠惰」(Müssiggang) と「労働」とが対概念として扱われている（八頁）ことを見れば、真の対立を意味するものではなく、むしろ倫理的な観点が強く感ぜられるものなのである。



(1) Weitling, *Garantien*, SS. 106, 131, 229, 232, 235/6, 263, usw.

(2) Weitling, *Garantien*, SS. 14, 20, 32, 41, 53, 56, 63, 89, 131, 237/8, 241, usw.

これらはいずれも素朴で感覚的な把握だと言ってもいいだろう。だが、それだけに注意しなければならないことは、ワイトリングは二つの階級をそのほかのさまざまな言葉で呼び、したがって両者にさまざまな規定を与えるのであるが、それらのどの規定を用いて呼んだばあいでも、かれの頭の中ではつねに、他のすべての規定を同時にもった具体的な全体像がリアルに思い浮かべられていた、[1] ということである。そのことを念頭においた上で、つぎにわれわれは、かれがさまざまな規定のうちからとくに「富者」と「貧者」、「働かない者」と「働く者」という規定をヨリしばしば用いた意味を考えてみたい。

(1) 「富者」、「働かない者」で考えられているのは、国王、商人、工場主たちであり（一一五、一三一、二頁など）、「貧者」、「働く者」で考えられていたのは、手工業者、職人、農民、工場労働者（八七、二五〇頁など）であった。

さしあたって、後者の規定についてのかれの見解をややつっこんで見るならば、かれは、奴隷制度が誕生してから、社会には「働く者と働かない者」とが存在するようになったと言う（四一頁）。そしてそれ以来、「働く者」は「働かない者」のた

めに自分を養う以上のものを生産しなければならない（一〇二頁など）だけでなく、現実には、働く者は働かない者のために最善最美のものを作り出し、みずからは乏しくかつ粗末なもので我慢することを強いられるにいたった[1]、というのである。このことを説明するのに、かれはしばしばつぎのような比喩を用いる。「一本の材木をかついでいる幾人かのうち一人が肩を抜けば、その重みは他の者の肩にかかって来る。」と。[2] ここでは、働かない階級が働く階級に剰余労働を強い、それを搾取することをもって自らの実存条件としているという事態がはっきりと認識されている。したがって、かれの「働く者」、「働かない者」という概念はたんなる対概念ではなく、真の対立を意味する概念として受けとられなければならない。

(1) Weitling, *Garantien*, SS. 64/5 u. 101. なお、ワイトリングのここの叙述は、マルクスの『経済学・哲学手稿』での叙述を思い起こさせるものがある。（選集、補巻四、三〇二頁参照。）

(2) Weitling, *Garantien*, SS. 59/60. 似たような比喩はしばしば用いられている。

ではつぎに、はじめの「富者」、「貧者」という階級規定は何を意味していただろうか。貧富とは物的財貨の所有量の多い少ないを表わす言葉である。物的財貨は消費財と生産財と貨幣とから成り立つ[1]。ワイトリングは、一面では、貧富によって、消費面、つまり欲求充足における大なる不平等が生ずることをはげしく糾弾している（七〇頁以下）。しかし、他面では、この貧富の差が賃金奴隷制を生みだしている事態をも明白に指摘している。生産手段たる土地や機械は富者の手にあるから（一五頁）、貧者は一片のパンを得んとすれば、みずからを奴隷として富者に売らざるをえない（五一頁）。つまり、「富者」と「貧者」という概念は、労働力と生産手段との分離という事態の上に立って、生産手段を持つ者と持たない者、いいかえるならば、働かす者と働かされる者とを表現しているのであり、そのことによって、「富者」、「貧者」という概念は、「働かない者」、「働く者」という概念とまったくおなじ意味に使われることができたのである。

(1) 貨幣はかならず消費財または生産財、労働力商品に転態されるから、そのうちの最後のばあいを除いては特別の考察を加える必要はない。だが、労働力購買に用いられる貨幣については、ワイトリングは特に注意を払ってはいない。

このように見てくると、ワイトリングが、現代社会の二大階級を「富者」と「貧者」、または「働かない者」と「働く者」というどちらの概念を用いて言い表わしても、かれが階級対立をつかむさいの中心概念は労働の搾取であったことがはっきりする。しかも、そのさい、かれははっきりと働く者の立場に立っているのである。

さきに、ワイトリングが「働く者」と「働かない者」という概念で階級をつかむそのつかみ方の一側面として倫理的な面を指摘したが、この側面は、かれが現代社会の人間をつぎの四種に分けるとき一層はっきりとしている。（一）有用な労働をする人間、（二）無用な労働をする人間、（三）労働をしない人間、（四）有害な労働をする人間（四一頁）。このばあいは、社会にたいする労働の有用性が問題とされている。そして、こうした倫理的な観点は、社会の科学的な分析からは一歩ひきさがったところで成立するものなのである。だが、それにもかかわらず、いや、ワイトリングのばあいは、むしろそれだからこそ、この観点はいま一つの積極的な意味をもっていた。働かない人間は非難さるべき人間であると同時に不必要な人間である。かくして、「かれら〔無為徒食者〕はわれわれ〔労働者〕を必要とするが、われわれはかれらを必要としない。」（六九頁）というワイトリングの言葉のうちに、われわれは、労働者階級こそ社会の主人になるべきであり、労働者階級だけで社会は立派に成り立つのだ、という労働者階級の自覚が、労働者ワイトリングによって高らかに宣言されているのを見ることができるのである。

さらに、ワイトリングでは、この認識は、現代社会においては労働者階級は不当に搾取され、抑圧されているという認識と結びついているのだから、われわれは、ワインリングのこの



『保証』のうちに、すでにプロレタリアートの階級意識が端緒的に成立していた、と言うことができるだろう。しかし、それはあくまでも端緒的であった。端緒的の意味はつぎに考察される。

## 三　ワイトリングの立っていた階級

前節では、ワイトリングが労働の搾取を媒介として階級対立をつかんだこと、そしてそのさい、かれは生産をする者、労働をする者として自己を意識して、はっきりと労働者階級の立場に立っていたことを見た。本節では、かれが一人称でもって呼ぶところのこの労働者階級の内容をさらにつっこんで見ていくことにしよう。そのためには、労働の搾取の形態をかれがどのように見ていたか、ということを調べる必要がある。

かれは労働の搾取を、直接生産過程と流通過程とにわけてバラバラに考察している。まずはじめに、直接生産過程にかんする叙述からとりあげよう。

かれは、奴隷制度の廃止を一つの喜劇と呼び、貨幣制度のもとでは新らしい奴隷制が成立していることを指摘している（四九頁）。いわく、「今日では、奴隷は血の出るほどに酷使されてその諸能力を利用される。そして、そのためにかれらが病気になったり、年をとったり、弱ったりすると、もはや食物をあてがうべきではないとして、仕事場・工場・家から追い立てられ

る。」（同頁）　ところが、これらの奴隷は決して身体の自由を拘束されて働かされているのではない。かれらは一塊のパンを求めてみずからを売るのである。「多くのばあい、もっともひどい労働に一群の忠実な奴隷を見つけることには何の努力も要らない。どこでも、またいつでも、窓の外に一塊のパンを吊り下げておきさえすれば、そこへ何百人もの奴隷をひきこむことができる。」（同頁）　そして「労働の代償としてかれらに与えられるものは、かれらが飢えに倒れて死ぬことがないぎりぎりほどのものである。」（同頁）

ここには、労働力の再生産の問題も、賃金を通じての搾取の問題もない。それどころか、論理的には無限の労働力が前提され、労働力は消耗品と見なされてさえいる。だが、このばあい、ワイトリングは、産業革命の時代にはどこの国でも一般的であった年少労働・長時間労働・賃金切り下げという日のあたりの事実を語っているにすぎないのだ。[1] ここでは、搾取率などまったく問題にならないほど明々白々な搾取以上の搾取が行なわれていたのである。剰余価値論はむしろ、隠蔽された搾取を暴露し、あるいは資本主義の運動法則を科学的に究明するためにこそ必要なものである。

(1)　ちなみに、プロシアでは一八三九年に年少労働・夜業が禁止された。フランスでは四一年に幼年工保護法が出ている。

それはともかく、このような形で搾取される労働者は賃金労働者であることはいうまでもない。

つぎに、第二に、流通過程における搾取をワイトリングはどのように見ていただろうか。かれによると、労働の搾取は貨幣のからくりを通じても行なわれる。「貨幣の発明が、生産物の相互交換、ならびにそれら生産物をもたらすに必要な労働時間を規定するためのものであるなら、では、なにゆえ貨幣に一定の価値を刻印しないのか、たとえば、一ポンドのパンの価値、一時間の穫り入れ労働の価値、一時間の針仕事の価値……などというように？　……少なくとも鋳貨の表に『一時間の労働の価値』と書いてあり、裏に鉄敷（カナイキ）とかハンマー、靴の穴あけ針……などとかが刻印してあるならば、民衆はそうやすやすと一杯食わされることはなかろうに。これらはみんな、この労働時間がそのもたらす全生産物に等しくきめられた価値をもつ、ということを示すための紋章となるものなのである。」（五七、八頁）この叙述を商業についての叙述と照らし合わせてみると、流通過程を通じての労働の搾取にかんするかれの見解は、つぎのようなものとなる。

かれの考えていた商品生産社会では、主要な交換は労働者階級と富者・商人階級との間に行なわれる。農民は商人に食糧を安く売り、手工業者・工場労働者はそれを商人から高く買う。また、手工業者はその生産物を商人に安く売り、農民はそれを

高く買う。農民・手工業者の作った奢侈品は商人によって安く買われ、富者には等価で売られる（一〇三―六頁）。こうして、商業と貨幣のからくりを通じてつねに損をするのは労働者階級であり、つねに得をするのは富者階級である。

このばあいの労働者階級とは、主として独立小生産者をさすことは明らかである。[1] そして、かれらが搾取されるのは、貨幣ではなくて実は労働である。なぜなら、右の引用にも見るように、ワイトリングでは貨幣はたんに労働時間の章標たるべきものと考えられていた（四七頁以下）から、貨幣の搾取とは、とりもなおさず労働の搾取にほかならなかったのである。[2][3]

(1) プロレタリアももちろんこのうちに含まれるが、しかし、それは消費者としてである。

(2) ワイトリングが搾取を労働（時間）の搾取としてとらえた点に、われわれは、労働価値説にもとずく剰余価値把握へつながる芽を見いだすことができよう。

(3) ここで、ワイトリングの労働価値説について触れておこう。流通過程における搾取にかんするかれの叙述の中には、具体的労働と抽象的労働との区別が十分ないままの労働価値説が見られるとともに、他方では商業は不等価交換（＝詐取）を基礎に成立しているとの見解が見られ、一見矛盾を呈している。また、かれは生産物価値について、「これらの各生産物の価値を規定するものは、その生産に用いられた労働時間よりも、むしろその生産物が余っているか足りないかということと、その生産物の量と質とである。」（『保証』四四頁）と述べてもいる。ここでは労働価値説が否定されているかに見える。しかしよく検討すると、かれはなるほど現代社会の商品交換において労働価値説が現実に妥当することを否定してはいるのだが、実はかれにあっては、現代社会は労働価値説が全面的に妥当しないまさにそのことのゆえに批判さるべきものと考えられていたのだった。だからこそ、かれの構想する未来社会では、生活必需品以外のものは全部が労働時間と交換されることになっている（『保証』第三篇第十章「交換労働時」）。「金持が価格を決定する」（二三七頁）現在の制度は、ごまかしのきかない労働時間を貨幣代りに用いる生産と消費の組織にとって代られねばならない、というのである。マルクスが現象の背後に貫徹するものとして価値法則をとらえたのにたいし、ワイトリングでは、むしろその需要供給説的な現象を批判する規準として労働価値説が考えられていたのである。

以上のように、ワイトリングが労働者として具体的に表象するものは、直接生産過程では賃金労働者、流通過程では主として独立小生産者であった。こうして見てくると、前の節では、ワイトリングが労働を媒介にして被抑圧階級を一つの階級とし

てつかんでいたことが見られたのにたいし、この節では、かれの考えていた「労働者」のうちには実際にはかなり異なった質のものが含まれている、ということが知られる。

しかし、ここに注意しなければならないのは、一応経済学上の範疇としては独立小生産者としてつかまれうるものの具体的な内容は何か、ということである。ワイトリングのばあい、それは決して安定した自己経営をいとなんでいるものではなく、すでに述べたところからも容易に推論できるように、当時の資本主義の勃興とともに没落していった手工業者、貧農であった。かれらは、商品生産者としては、つまり抽象的かつ形式的に考察すれば、他のすべての商品所有者と平等な権利をもっている。だが、このことはあくまでも論理上のことであって、現実的には不等価交換を強いられるのはいい方で、仕事や土地そのものを失なってしまっていた者が多く、したがって、生活においては賃金労働者と何の差異もなかったのである。かれらは、現実にも賃金労働者になるほかはなかった。

結局、ワイトリングの考えていた労働者は何であったか、といえば、それは、一方では没落した独立小生産者としての側面と、他方では新たにプロレタリアートに再編成されつつあるという側面とをあわせもったものとしてつかまれることができよう。つまり、それはかれ自身のことにほかならない。

## 四　プロレタリア階級意識の端緒的成立

ワイトリングの立っていた階級が、このように没落した独立小生産者と近代プロレタリアートとの二つの側面を同時にもったものであるということは、この階級の単一性、階級としての純粋性が現実に十分な意味では存在していなかったことを反映するものであり、そこに、ワイトリングの思想について指摘されるいろいろの弱点が生じてくる根拠があるのだが、このことはむしろ、当時のドイツ、フランス、スイスの遅れた経済発展に制約されたものであると考えられる。

だが、社会主義成立史上においてワイトリングの思想を見るばあいにわれわれが注目しなければならない点は、むしろ当時の被抑圧階級が現実には多様なものから成り立っているにもかかわらず、ワイトリングがこれを一つの統一的な規定でつかもうと努力したことである。そして前にも述べたように、そのさいの中心になる指標は労働であり、それの搾取関係であった。だが、ワイトリングが労働でもって階級対立をつかんだということの意義は、ただたんに階級を一つの規定で統一的につかもうとしたことにとどまるものではない。さらに、この階級が社会変革の主体になるという論理がその底に蔵されている点を見逃すべきではなかろう。

そこで、前節で見た労働を通じての搾取の問題をいま少し検

討してみよう。まず、直接生産過程での搾取について見れば、このばあい、労働時間の概念がはいっていないことからもわかるように、剰余価値の搾取という量的な考察はほとんどないに等しい。むしろここでは、労働そのものにおける疎外が問題にされているといった方がよかろう。[1]「今日の奴隷制」（四九頁以下）という認識の仕方についてもこのことは言える。ここでは、「働かない者」（「富者」）と「働く者」（「貧者」）との対立はまったくむきだしのままである。

(1) 労働の疎外についてワイトリングは、①現代社会では労働が苦痛となり（四五頁）、偶然の手に委ねられていること（四四頁）、②労働生産物が労働者のものでなくなること（一〇一頁）、③労働力が財産化すること（四〇頁）など、疎外の事実を断片的に見てはいたが、それらを理論的に統一してつかむことはなかった。

これにたいし、流通過程での搾取は、まさしく目に見える形での搾取であり、量的規定が主となって対立が見られている。このことは、流通過程がもはら量の世界であることを考えれば当然のことであるが、しかし、ワイトリングは流通過程そのものにおいて対立を見たのではない。

商品生産社会では、商品は労働の対象化としてのみはじめて意義をもつ。逆に、社会的労働はすべて商品に対象化されなければならない。そして、対象化された商品が自立性をもち、さらに疎外の関係が加わることによって、今度は労働力そのものが商品化される。こうして生じた対象世界としての商品界の運動を扱うのが経済学である。

ワイトリングはやはり流通過程での交換の規定者として労働を見たのであるが、かれはもとより商品の価値分析をすることが目的ではなかった。かれには、商品をば、その中に労働がすでに対象化されてしまったものであるという風に、客観的に見ることはできなかった。かれにとっては、商品はあくまでも自分たちの労働の産物なのである。したがって、かれが流通過程に「労働時間」をもちこんだことは、直接生産者からは疎外されてしまっている商品の中に、あくまでも主体的活動としての労働の痕跡を見つけんがためにほかならない。そして、この客観的な物の世界の中に、労働を媒介にしての対立という人間関係を見ようとしたのである。ワイトリングによって流通過程にもちこまれた「労働時間」概念は、かくして、商品に対象化されている対立を、主体としての真の人間同士の対立に還元するための道具だったのである。

このことは、社会主義思想にとってはきわめて重要なことである。なぜなら、資本主義社会というものは、商品生産の矛盾が発展して自然に崩壊するものではなく、その矛盾が現実にも、意識の面でも、その社会に生きる人間にはね返り、そして、かれら人間の意識的な行為を媒介にしてはじめて転覆しうるもの

であるから、客観世界と主体とをつなぐ活動としての労働において矛盾・対立を見ることなしには、変革の理論は出てこないからである。

こうして、ワイトリングが、主体的活動としての労働において階級対立を見ようとしたことは、たんに、当時の現実の中で被抑圧階級を直接生産者というただ一つの範疇で示そうとした点に意義があるばかりでなく、さらに、階級対立というものを正しい場でつかみ、そこから現状批判と変革のための実践を統一する方向を示した、という点でも大きな意義をもっていたのである。また、労働を中心にすえて階級対立をつかんだことは、理論的な構えとしては、やはり近代プロレタリアートを中核にして階級をつかむ方向へと進んでいくはずのものなのである。

このように見てくると、われわれは、ワイトリングの思想に反映したかぎりで、当時すでに、必ずしも均一な質をもったものではないにしても、当時の被抑圧階級が一つの革命主体に形成されつつあったこと、そしてその中核としてプロレタリアートがしだいに比重を増しつつあったことを見てとることができはしないだろうか。

しかし、ワイトリングの時代の被抑圧階級は現実には多様なものであり、そのため、これをただ一つの規定で統一的につかもうとすれば、その規定はいきおい抽象的なものとならざるを得ないことはすでに見たとおりである。すなわち、この抽象的で一般的な規定は「働く者」（直接生産者）であった。

ところで、階級認識におけるこうした抽象性・一般性は、ワイトリングにおいて経済学が欠けていた[1]ことの別な表現にすぎないのだが、このことは、また、かれにおける歴史の欠如とも密接に結びついている。つまり、かれは、労働を搾取されるという点で現代社会の農民も手工業者も工場労働者もすべて「働く者」（直接生産者）という一つの階級に包括して認識していたのであるが、このことは他方では、歴史をさかのぼって各時代の被搾取階級をただ一つの範疇で示そうとする試みとなっても現われている。かれにあっては、奴隷→農奴→〔農民〕〔手工業者〕はつねに貧者であり、被抑圧階級であり、労働者であった。したがって、かれによれば、基本的な歴史区分は、原始状態、私有財産制にもとずく階級社会、これから実現せらるべき無階級の未来社会とになる。奴隷制時代・封建時代・資本主義時代は階級社会として一括され、それらの時代の個々の特質はかれの関心の外にあったわけである。

(1) ワイトリングの経済学にたいする態度はつぎの言葉に示されている。「わたくしの課題は、決して新らしい経済理論を作りだすことではなくて、労働者がおかれているひどい状態と、支配者層の側から加えられる不正な仕打ちとを労働者の目にはっきりさせるにもっとも適した既存の経済理論を採用することなのだ。」(Joho; *Traum*, S. 114.)

なお、かれがスミスを読んだ形跡もある。("Der Bericht über Haussuchung vom 19. Juli 1843." in: Barnikol; *Weitling der Gefangene und seine "Gerechtigkit,"* Kiel 1929, S. 186.)

(2) 経済学は客観的な商品世界の論理としてはじめて成立しうるものであり、ワイトリングのように実践的に当時の社会を全体としてつかもうとするばあい、経済学が武器となるためには、やはり、商品生産が当時の社会を全面的に支配していることが必要であった。しかし当時における資本主義の展開の未熟なことはすでに見た通りであり、ここから、階級構造の多様性と、経済学が現実の社会を全体として認識する武器となりえなかった事情が生じたと考えられる。

このように、かれの労働者概念が、近代的プロレタリアをも含みうるものでありながら、しかも奴隷・農奴をも含んでいたのをはじめ、一般にかれが社会批判に用いる諸範疇の多くは、やはり一般的・抽象的なもので、それでもって現代社会を一応説明できるとともに、またこれまでの階級社会のすべてを説明できたのである。私有財産概念にしても、資本主義時代の資本を含みはするが、決して私有財産の一定の歴史的実存形態たる資本を直接に意味するものではない超歴史的な概念だったのである。[1]

(1) ワイトリングの歴史観は啓蒙の圏内にあると一般にいわ



れている。(Vgl. Mielcke; *Deutscher Frühsozialismus.* Reichenau; Wilhelm Weitling. "*Schmollers Jahrbuch*" Bd. 49, SS. 293 ff. Kaufhold; *Einleitung*, S. XXIV. usw.)

結局、ワイトリングの功績は、近代プロレタリアートが未成熟で、現実に多種多様な階層が存在する段階で、被抑圧階級を一つの階級として認識しようとし、しかも、この現実の中では、かかる試みはいきおい制約を受けなければならなかったにもかかわらず、労働を通じての階級対立をはっきりつかみ、そして、それらのことによって、やがて「働く者」の実存形態がひろくプロレタリアとなるような時代の革命理論——科学的社会主義——の準備をした点に存する、ということができよう。

いいかえると、ワイトリングの思想の中では、科学的社会主義における主体的な要因が、被抑圧階級＝直接生産者＝「働く者」＝人民　という形で準備されていたのである。やがて、この「働く者」＝人民の中核が現実にプロレタリアートという結晶体として析出され、客観的な主体として自己を歴史の中に実現するとき、同時に空想から科学への社会主義の転化がなし遂げられることになる。わたくしが、ワイトリングにおいてプロレタリアートの階級意識の端緒的成立を見ようとするゆえんはここにあった。[1]

(1) ちなみに、このように見ると、いちがいに「フランス社会主義」といっても、サン・シモン、フーリエなどの流れ

と、ブランキ、ソイトリングなどの流れとはかなり区別する必要があるのではないか、という予想をもつ。

## 五　革命理論に現われた階級的自覚

以上では、ワイトリングの現代社会批判の中で、社会主義革命の主体的要因がどのように準備されつつあったかを見て来たわけであるが、おわりに、角度を変えて、右のような階級的自覚がかれの革命理論の中ではどんな形をとって現われているか、ということを見てみよう。

かれは革命を必然的なものと考えた。このばあい、かれの見解の基礎をなしているものは観念的な進歩観である。[1] かれでは、進歩と革命は時には同義語として考えられていたから、進歩の必然性は同時に革命の抽象的な必然性を意味していた。しかし現実に即して考えても、私有財産制度のもとで発展を阻まれている生産力とどんどん増える人口との間のアンバランスが、労働者の貧困を増大せしめ、その結果「人民の羊のような忍耐が、突然、解き放たれたハイエナのような狂暴さに変っても何の不思議もない。[2]」（二五〇頁）しかも、富者・権力者というものが、その快適な生活状態のゆえに人民の貧窮に目を向けることができない（二四七、二七六頁）上に、問題がかれらの個人的な利益を排除しようということにある（二四七頁）のだから、なおさら平和的な改革など望みえない（二六〇頁）のである。

(1)　「人間は一般に変化・運動・進歩を愛する。」（二七一頁）ほかに三―四頁も参照。

(2)　ほかに「革命をもたらすものは革命理論ではなくて、〔社会の〕現状にほかならない。」（二七四頁）という言葉も見られる。

このように、かれは来たるべき革命と、その暴力的遂行の必然性をはっきりと見通していた。この洞察はかれを他の社会主義者たちから大きく区別するものなのであるが、しかしこのすぐれた点も、かれのばあいには、革命の主体となるべき勢力を「大都市に群ってどん底の貧困に喘いでおり、絶望に陥っている大衆」（二五九頁）と「美辞麗句では容易に動かすことのできない〔無知な〕ドイツの農民」（二七三頁）に求めることによって成立したものなのである。これらの貧民階級は「即座に与えられる物質的利益」（同頁）によって蜂起に加わるか、あるいは盲目的な自然発生的な蜂起を起こすのであるから、かれら自身は何ら革命のプログラムをもたず、いわば革命の物理的な力（二七一頁）を提供するにすぎないのである。して見れば、かれらを真の革命の主体と呼ぶことはできない。このことは、かれのいう被抑圧階級の具体的な内容が多様であることに対応するものと考えてよかろう。

そこで、ワイトリングにあっては、革命を指導する者は少数の革命家である。時には「第二のメシヤ[1]」であったりする。か

れの頭の中では、自分や「義人同盟」の仲間が考えられていたのかも知れない。マルクスが「哲学がプロレタリアートのうちにその物質上の武器を見いだすように、プロレタリアートは哲学のうちにその精神上の武器を見いだす」[2]と述べた時、かれはおそらく、プロレタリアートが哲学を自己のものにして階級的自覚に達した時、プロレタリアートは真の革命主体となることができる、ということを意味させたのであろう。だが、ワイトリングの頭の中ではこの両者はバラバラに切り離されたままでいる。この意味では、革命は必然ではなく当為にとどまっている、というべきである。

(1) のちに、かれは自分こそ「第二のメシヤ」だと思いこむようになった、といわれる。(Joho; *Traum*, SS. 65 ff.)

(2) マルクス『ヘーゲル法哲学批判序説』、選集、補巻四、一九一頁。

誤解を避けるためにいえば、ワイトリングがこのように革命主体を精神的な力と物質的な力とに切りはなして考察したということは、当時の歴史的現実を現象的に考察したばあいの結果とも一致するであろうが、しかし、ここで大切なことは、革命の精神的な力であるとワイトリングが考えていたもの、端的にいえばワイトリング自身も、現実には物質的な力と称せられているものとおなじ仲間なのであり、ワイトリングが「われわれ労働者」と一人称で呼んでいたところのものにほかならないのだから、客観的に見れば、両者は同一のものであり、ワイトリングをはじめとするこの精神的な力は、まさしく、この階級の自覚を表現するものなのだ、ということである。

それはともかく、組織論としての革命理論から見たばあい、革命における精神的な力と物質的な力とを切りはなしたことは、やはりかれの革命理論の一つの弱点であることにまちがいはない。しかし、それまでの社会主義の多くが、社会革命を一つの抽象的な道徳的要請としてのみつかむことが多かったのにくらべると、ワイトリングが、いぜん道徳的要請にちがいはないのだが、その要請の実行者としての革命主体の問題をつけ加えたということのうちに、われわれは、社会主義思想史の中で革命が道徳的要請から歴史的必然へと転化する過渡期の姿を見ることができる。

ついでにいえば、かれの考えていた被抑圧階級がやがてプロレタリアートに結晶すべきはずのものであったことに並行して、かれの考えていた革命は、階級そのものの廃絶を主張する点において、人類解放の革命、つまり客観的にはプロレタリア革命を意味するものでなければならなかった。歴史にのっとっていえば、かれは来たるべきドイツの三月革命にプロレタリア革命を期待していたことになる。かれが資本主義社会の特殊歴史性を認識しえなかったことと相まって、このことは、かれの思想の空想性（現実に力をもちえないこと）を規定することになる

が、しかしまた、当時の現実の中で空想的であったというこのことによって、かれの思想は、逆に永い生命を保証されたように思える[1]。

(1) このことは、三月革命の失敗と、マルクスの永続革命論とも関連させて考えらるべきである。

また、ワイトリングは不十分ながらも移行期を問題にし、権力についても若干触れているが、これはやがてプロレタリアート独裁の思想へと結実していくはずのものである。

## 六　むすび——社会主義の主体的要因

以上で、一八四二年のワイトリングの思想[1]の中に、プロレタリアートの階級意識が端緒的に成立していたことを示すことができた、と思う。

(1) 前稿で述べたように、ワイトリング思想の基本線はすでに一八三八年の『人類の現状と理想』において成立していた、と考えられるから、このことは一八三八年にまでさかのぼって言ってもよかろう。

だが、この思想はワイトリング一人のものではない。『調和と自由の保証』が「義人同盟」の依頼で書かれたいきさつからも、ワイトリングの思想は当時のパリの手工業者を中心に担われていた思想であることが察せられる[1]。したがって、手工業者中心の「義人同盟」がやがて「共産主義者同盟」へと発展していったことによって、ワイトリングの思想も科学的社会主義(『共産党宣言』)へと展開をとげていったと見ることができる。

(1) マルクスがプロレタリアートをはっきりと革命の担い手として認めるのも、やはりパリに来てからであった。(『ヘーゲル法哲学批判序説』参照)

それでは、ワイトリングの思想が、空想から科学への社会主義の歴史的な歩みの中で客観的にもっていた意味は何であったか、このことを、おわりにあたって総括的に述べることにしよう。そのためには、科学的社会主義とは何かということについて、あらかじめ考えておく必要がある。

最近のソヴェトのある論文ではつぎのように述べられている。「マルクスの……意図と努力のすべてが向けられたものは、プロレタリア革命と社会の社会主義的変革の歴史的必然性を科学的に基礎づけることにあった。社会主義への移行の不可避性をマルクスは徹底して資本主義の経済的運動法則から導いた。だからこそ、かれは、未来社会の何らかの見取図を提供することは全く無駄なことだと考えたのである[1]。」

(1) Leontjew, L., Karl Marx über den Sozialismus. (“*Sowjet-Wissenschaft. Gesellschaftswissenschaftliche Beiträge.*” 10/1958. S. 1136.)

これは社会主義の理解としては決して十分ではない。ここでは、社会主義は経済学に限定・解消されてしまっている。社会

主義への変革の条件を作り出すものが資本主義の経済的運動法則であるとしても、それだけでは革命は起きない。資本制社会でも、労働者は商品であると同時にまた商品ではない。客体であると同時にまた客体ではない。ということは、具体的な生きた人間を経済的範疇だけでつかみ切ることはできない、ということである。こういう言い方をすれば、私はあまりにもわかりきったことを言っていることになるが、社会主義が一定の生産様式を基底とする全社会体制変革のイデオロギーであるとするならば、社会主義は決して経済学に限定さるべきものではなく、広く、政治・思想の運動法則をも、みずからのうちに統一的につつみこんでいなければならない。上部構造と下部構造との連関が具体的に明らかにされているとは決していえない今日、このことを強調しても決して無意味ではないはずである。

たとえば階級意識にしても、経済過程で基礎づけられる理念としての階級意識が、歴史の中で現実にみずからの姿を現わす過程・条件はどのようなものであるか、労働過程の具体的な状態・窮乏化の様相、政治のあり方、国際関係（民族問題）などが、もっともっと究明され、統一的な視野のもとにおさめられなければならない。

こうした見地は、歴史の発展を具体的につかもうとするものであり、歴史における意識的な人間の積極的な役割を承認しようとするものである。したがってこの見地からすれば、さきの



引用に見られるような、社会の発展を因果論的にのみ見る立場は正しくない。社会主義がすぐれて実践的なものであるとするならば、たんに対象的な「科学的」認識にとどまらず、目的論的思考をもとりいれ、イデオロギーとしての性格をも現わさざるを得ない。因果論と目的論とを統一する場は実践のうちにあるのだが、この統一は決してたやすいことではない。しかし、現段階の歴史が、われわれにこの課題の達成を要求している。

社会主義がすぐれて実践的なものとするならば、その担い手、実践主体の存在が要請される。プロレタリアートがそれである。わたくしが、ワイトリングの思想の中でプロレタリア階級意識の成立のいとぐちを見いだそうとし、その科学的社会主義への接続を強調するゆえんもまたこの点にある。

それはともかく、こうして見ると、初期社会主義一般は、自由・平等というブルジョア革命のイデオロギーをプロレタリア革命のイデオロギーに転化する媒介として成立するが、そのうちでワイトリングの社会主義は、プロレタリアートの階級意識をば、被抑圧階級＝労働階級一般の階級意識として成立させ、同時に、目を基礎過程に向けることによって、経済学への志向を持ったものとして、[1] 社会主義が科学へと飛躍する直前の姿をとっているものということができよう。

(1) この点については、本稿では触れることは少なかった。また、完成された社会主義が、プロレタリアートのうちにお

いて主体的自覚と科学的認識の統一として成立し、そのことによって、このプロレタリアートが歴史において真に革命の実践主体となることができるとするならば、ワイトリングの社会主義はその主体的な自覚として科学的社会主義の中に止揚されているのだ、ということがいえよう。そしてこの止揚こそ、実は社会革命としてのフランス革命が生み出した資本主義社会の発展の中で一つの階級が成長していったことによってはじめて可能となったのである。一八四二年のドイツ、フランスにはまだその条件はなかった。だから「義人同盟」の「共産主義者同盟」への発展は、一八四七年のイギリスにおいて行なわれたのである。（一九六〇・五・九）

あとがき――前稿と本稿は、もともと私が修士論文として昨年一月まとめたものに、伝記を加えた上、その他の部分も大巾に改訂を加え、問題を本稿の題名のごとくしぼったものである。修士論文とのあいだに、また前稿と本稿とのあいだにも若干問題意識の差異が生じて来ていることをお断りしておく。